

はじめに

COVID-19(Coronavirus disease 2019)——これが「新型コロナ」と通称される感染症にWHOがつけた正式名称である。中国湖北省武漢市で遅くとも 2019 年 12 月上旬には発生していたとされるこのウイルス性感染症は、またたくまに世界中に広がった。4ヵ月経った 2020 年4月9日時点で、世界の感染者は 150 万人、死者は8万 8000 人に達している(経過は7～9頁参照)。いまも終息の気配はみえず、各国の医療従事者は、自らの身を感染の危険にさらしながら、日夜この病とたたかっている。

中国からイタリア、スペインなど欧州各国へ、さらに米国へと感染が拡大するにつれ、各国の指導者はつぎつぎに緊急(非常)事態宣言を発令し、移動制限、外出禁止、営業自粛などの対策を進めてきた。市民生活や企業活動に与えた影響は甚大で、すでに大恐慌の兆しさえみえている。

振り返ってみれば、これまでも人類はペストや結核といった感染症に苦しめられてきた。ウイルスを病原体とする感染症では、1918 年から 1919 年に世界を席卷した「スペイン風邪(インフルエンザ)」の際は、諸説分かれるが、世界人口の約 30%が罹患し、5000 万～1億人が死亡したと推計されている。日本でも 45 万人の尊い命が失われた。しかし、今回の新型コロナのように、一つのウイルスの感染対策のために世界各国が社会・経済機能を停止させるというのは未曾有の事態といえるのではないかと。

はたして、われわれはどこにいてどこに向かおうとしているのだろうか。

ひとつ危惧されることは、「命の危険」という絶対的ともみえる切り札を前に、このパンデミックとその対処法をめぐる議論が一面化してはいないかということだ。新型コロナとそれが引き起こした事態について、現段階で判断するのはあまりに早計とはいえ、議論の方向を「ひらく」必要はあるのではないかと考えた。

そこで編集部は、パンデミックが急速な拡大を続けていた3月下旬、広い分野の方々に寄稿をお願いした。ウイルス学や国際保健学をはじめ、哲学、医療人類学、文化人類学などの研究者、海外の辺境の地を取材するジャーナリストや探検家、医師や食生活研究家、そして農家……。その多角的・複眼的な視点から、新型コロナとそれがもたらした社会現象について論じていただいた。

ウイルスと人間との関係は、長い地球の生命と人類の歴史とともにあり、一筋縄ではいかない。そしてまた、新型コロナが「人獣共通感染症」の一種である以上、人間の側からばかりでなく、野生動物や家畜の側からみる必要もある。われわれをいま恐怖に陥れているウイルスは、他のコロナウイルスと同様に、農業関係者を悩ませてきた口蹄疫ウイルスや鳥インフルエンザウイルスなどと同じ RNA ウイルスの一種なのだから。いま、地球環境全体に人類が影響を及ぼすようになった時代を、新生代第四紀完新世から区分して「人新世」と呼ぶ見方があるが、新型コロナはまさに人新世の落とし子(鬼っ子)なのかもしれない。

それと同時に、この感染症とその影響がこれだけ急速に広がる原因となったわれわれの社会や経済システムの脆弱性に、この際しっかりと目を向ける必要があるだろう。

そこに新型コロナ禍という大きな災厄を希望に変える手がかりもみえてくるはずである。

*

ここに収録された原稿を受理した日付けはそれぞれの記事の末尾に記した通りだが、ほとんどは日本で緊急事態宣言が発せられた4月7日以前のおおむね2週間ほどの間に脱稿している。事態の先行きがまったくみえない状況のなかで、勇気をふるい、短期間に原稿を仕上げてくださいました 19 氏と農業高等学校のお二人に深く感謝する次第である。

新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束を願ってやまない。

本ブックレットが新型コロナに関する議論を開放し、掘り下げるきっかけとなれば幸いである。

2020 年 4 月 10 日
農山漁村文化協会 編集局